事務局 amateur スタッフによる

フォロー・アップ メモ・ランダム

異常気象に悩まされることが多かった今年の夏も過ぎ、秋分の日を迎えることができました。この日は昼の長さと夜の長さが同じですが、太陽が最も高くなる南中時刻は何時でしょう。昼休みが始まる正午でしょうか。残念ですが、正午に太陽が最も高くなるのは明石天文台がある東経135°の経線上だけです。それ以外の地域では各地で日の出、日の入りの時間が違うように南中時刻も違ってきます。北海道の最東端にある根室市の夏至の日の南中時刻は11:19です。同じ夏至の日の九州の最西端にある佐世保市では12:22になります。日本列島の最東端と最西端では南中時刻に1時間ほどの時間差があります。日本の標準時が明石天文台で南中したときと定められたのは1888(明治21)年のことです。それまでは、列島の各地ではその地方の太陽や月の運行にあわせて暮らしていたと思います。少なくとも弥生時代の人々はそうだったはずです。

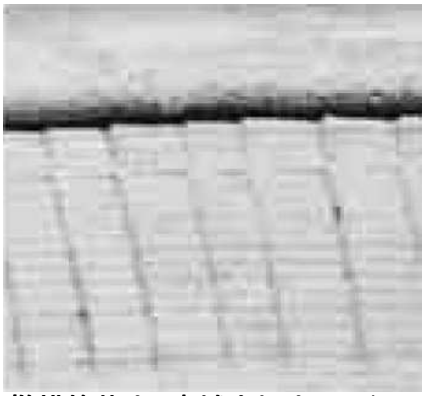
日用品である弥生土器は、何度か使っているうちに水が漏るようでは役に立ちません。だからその作り方は、母から娘にきっちりと受け継がれていたに違いありません。機能性ばかりでなく、装飾性も含めて伝えられたことでしょう。しかし、何世代、何十年と受け継がれていくうちには、少しづつ変化があります。その変化の様子を丹念に観察して変化の方向を見定めることで、土器を編年していくことができます。するとその編年された土器を物差しとして、土器が作られ、使われた時代の様子を考察することができるわけです。

櫛描波状文（船橋市郷土資料館）

土器の変化は、天才的な誰かの閃きで起こったかも知れませんし、製作工具の変化でもたらされたかもしれません。ときにその変化は画期的な機能性の向上を導いたこともあります。壁の薄い甕は、外面に受ける炎の熱を、甕に満たされた液体や食材に短時間で伝えるので、調理時間の短縮に大いに貢献したと思われます。薄くて軽い土器は、持ち運びにも都合がいいでしょう。そんな土器は当時の誰もが作りたがった(欲しがった)のだと思います。

水耕稲作が伝わった時期に、その収穫物を貯めておく道具として土器にもバラエティが出てきたようです。各地の土器の形状や文様が変化していくのは、新しい技術や技法がその要因だと思われます。ですから土器の変化は先進地域からそうでない地域にベクトルが向かいます。列島においては西から東がその方向です。九州に入った技術や技法が山陰を経て北陸などに、また瀬戸内を経て畿内地域に伝搬したと考えられます。前述した薄い壁の土器は、山陰・瀬戸内から始まった独自性のある形状のようですが、一般的な伝搬方向と言うのは西から東が順当です。畿内に王権が成立し、律令制が整いだしてからは、畿内からの人為的な情報発信はあったと思います。情報提供することで見返りを求め、支配を進めるためには情報を管理していく必要がありますが、弥生時代の頃は自然法則に則った伝搬が主であったと思われます。

弥生時代の伝搬は、それを目にしたり体験した人によって伝わっていると考えられます。交通手段のない時代ですから、人の行き来もどのくらいでしょうか。また一人二人で伝搬が成功するかも分かりません。だから弥生時代の技法や情報、それらを包括する文化の伝搬には相当の時間がかかると思われます。また、縄文や弥生の時代においては、使っている人たちが軽くて熱効率の高い優れた土器を使うことにメリットを感じても、それを他の地域の人たちに伝えることでメリットを享受することはありません。だから伝搬は地理的要因や気象、その他の要因で自然法則に従って起こるので、傾斜(情報の濃淡)ができて当然だと思います。その様子は東西にも広い列島の、各地で南中時刻が異なる様子と同じではないかと考えるのですが、いかがでしょう。



櫛描簾状文（安城市埋文センター）

講義では、弥生時代の前期、中期、後期の北九州、山陰、瀬戸内、畿内の土器を系列的に概観し、各地域の違いを見ました。そこに存在する差は大きく、同規模の韓半島においては後に三つの国になるような多様な文化の共存を認めた中で、統一新羅で全体が一つになったと理解していますが、日本は専門家の大多数が、単一文化圏内の単なる地域差と解釈しているようです。統一の黎明期には当局側にそのような意思があったのは理解できるところですが、いくつかの歴史的体験を経た現在においてなお、脱却できずにいるのは理解に苦しむところです。

※ 古代史（弥生時代～飛鳥時代）に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論　大募集　（体裁は自由ですが、文書でお願いします）